

研究の目的

本研究の目的は、社会が危機的な状況に陥った際に必要となる子育て支援のあり方を、地域内でのつながり（ネットワーク）構築の場づくりという視点から、実践を通じて明らかにすることにある。

2019年12月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は、複数回の緊急事態宣言発令を経てワクチン接種が進む現在においても依然として日常生活の脅威となっている。事態が長期化する中でさまざまな課題が生じているが、地域社会においては特に子育てについて深刻な状況が浮き彫りになってきた。それを受けて子育て支援の在りようも変化している。公的なサービスはアウトリーチ型での支援は難しく、緊急事態宣言の発出などの影響を受け、普遍的な場の提供、サービスの担保が困難となっている。このような状況下で、子育ては家庭の中で他者とのつながりなく行わざるを得なくなっている。子どもと養育者が外とのつながりなく自宅で過ごす時間が増えることにより、ストレスを抱え虐待が増えることなどが懸念されていたが結果として統計上もDVや虐待が増え、若者や女性の自殺が増加していることから、女性や若者の生きづらさが「家」に持ち込まれていることが想定される。申請者はこれまで、地域内でのつながりによる子育て支援活動に取り組んできた。そこで本研究は、コロナ禍の1年間を経た子育ての現状および課題を、ヒアリング調査・文献調査を通じて明確化した上で、実践から研究にフィードバックする取り組みの一環として地域住民を対象としたワークショップを開催し、地域内でのつながり（ネットワーク）構築に向けた「集い」が子育て支援にもたらす有効性について分析を行う。調査は、申請者が関係を持つ町会所属者ならびに教育関係者へのインタビューに加えて文献・資料分析によって行った。

調査の概要

調査の概要
日時 ①2021年9月22日（水）16時から17時
三鷹市中原3丁目都営住宅集会所
②2021年11月28日（日）14時から16時
三鷹市井の頭コミュニティセンター

子育て支援に関するワークショップの開催。井の頭一丁目町会の活動である「ママと子どものブックカフェ」およびNPO法人「居場所作りプロジェクトだんだん・ばあ」、NPO法人三鷹ネットワーク大学との共催により開催

NPO法人「ぷるすあるは」が作成した『ゆるっとこそだて応援ブック』を活用し、地域住民に対して、子育ての現状と課題、地域における子育て支援などに関する意識調査を行い、地域内に子育てに関するつながりづくりの場を設けることの有効性について検討した。

参加者 ①10名（子育て当事者2名、地域関係者3名、本学関係者2名、学生3名）②19名（子育て当事者15名、地域関係者2名、本学関係者1名、学生1名）



調査結果から明らかになった現状と課題

2つのワークショップから見てきた現状と課題

新型コロナウイルス感染拡大の影響により大人も子どもも生活環境が変わり、ストレスを抱えることとなった。この状況変化により、家庭内に問題を抱えながらもなんとかバランスを保ち生活を維持してきた「家」に歪が生じ、コロナ禍により課題が表面化することとなった。問題は家族の中に押し込まれ「家」の孤立を促進した。ワークショップにおいても子ども・養育者双方にストレスが生じ、新たな生活や仕事の在り方を考えるきっかけとなっていた。このような現状を踏まえ地域の中で子どもを育てることを共に行うことができる仕組み、子育てを側面的にサポートするサービスの在り様を引き続き調査していく。そしてこの視点を子ども虐待を未然に防ぐことに生かしていくことが重要である。

ワークショップで聞かれた声（一部抜粋）

- * 隙間時間を活用するためにもWEBでの情報発信を検討してほしい。
- * 子育てに必要な情報をどこにどうやって取りに行ったらいいのかわからない。
- * サービスがあっても必要な時に使えていない。
- * 子育てが地域の中で特別なものになりつつある。
- * コロナでつながる場の必要性を実感した。
- * 自己判断の難しさ：幼稚園→来たい人は来てもいい、行く基準が分からない、ほかの家はどうしているのか確認できないなかでの不安
- * 視野が狭くなり、子どもや夫婦の関係が煮詰まる
- * 改めて学童がライフラインであると実感した
- * 近隣苦情 クレーム、児相、警察を呼ばれた

今後も継続して、子育て家庭へのインタビューと、支援と人をつなぐための関りについて調査をする必要がある。従来、支援対象になりにくい家族にとってもこの時期の育児は負担が大きいものとなっている現状を踏まえ、地域の中で子どもを育てることを共に行うことができる仕組み、子育てを側面的にサポートするサービスの在り様についても引き続き検討していく。